

# 文化ゾーン整備と県・市庁舎移転の提言 ～夢のあるまちづくり10年後の県都福井へ～



2020年1月 福井経済同友会



## 目次

1. はじめに	1
2. 福井城址公園整備	2
3. 県庁舎などおよび市庁舎移転	4
4. 二次交通の充実（新駅構想）	8
5. まとめ	10



## 文化ゾーン整備と県・市庁舎移転の提言

～夢のあるまちづくり10年後の県都福井へ～

目的：置県百五十年を迎える2031年に福井城址一帯を福井のシンボルとして文化ゾーンを整備し、福井県庁舎等及び福井市庁舎を移転することにより、福井市中心エリアの交流人口の増加を図ること

### 1. (1) はじめに

2023年に北陸新幹線敦賀延伸を控え、福井県内を南北に橋脚が連なる風景が出現し、期待感が一層膨らんできている。しかもその後には、京都・大阪までの延伸および早期開業を実現する活動も残っており、新幹線建設という国家プロジェクトが我が県で今後も継続される経済効果は、想定以上のものになるであろう。

テクノロジーは日進月歩を遂げ、AIやビッグデータの活用が進み、社会の在り方を根本的に変える段階に差し掛かっており、暮らしや働き方、教育、医療、交通、金融など様々な分野で急速に変わろうとしている。私たちは現在進行中の福井駅周辺再開発計画と同時に、社会の変化を予測し未来の県都福井の在り方を議論してきた。

2013年「県都デザイン戦略」の精神を踏襲し、福井経済同友会は2015年に「北陸新幹線延伸に向けた県都再生」として県庁の移転とコンベンションホール設置、2018年に福井駅周辺整備としてコンパクトシティ化を目指し、駅東口を観光・教育・文化の中心に、西口をビジネス・食の中心にゾーニングを、との提言を行った。

福井県が150歳を迎えるという歴史的転換期に、まちづくり議論をより巻き起こすために、県と市が密に連携し検討すべきとの強い思いから今回の提言に至った。

### (2) 福井の顔として、福井の文化遺産を再整備

JR福井駅を降りて約300メートル歩くと、福井城址のお堀と県庁が見えてくる。まさに福井の玄関とも顔とも言える場所である。現在は福井県庁として利用されているが、まぎれもなく福井の誇る文化遺産である。たくさんの地域内外の人たちのためにも、私たちはここを「行政の地」ではなく「交流の場」とすべきと考える。

2018年2月大雪に見舞われ、想定外の除雪経費など大幅な支出が、福井市の財政を圧迫させた。その影響から東公園に予定されていた「福井市文化会館整備基本計画」は2023年度（令和5年度）末まで保留となった。新幹線がやってくるこのタイミングでまちづくりが停滞しかねないと危惧している。

交流人口を増加させていく仕組みづくりを進めるべきである。それには福井の顔となりシンボルとなる福井城址へのコンベンション設置や文化ゾーンの整備、そして新しく県庁舎等や市庁舎が移転し整備されることが必要だ。また県庁や市役所への通勤や訪れるひとたちのために、JR 福井駅からもう一步近い箇所に新たな交通手段を考え、新駅を作るなど、遠方からのアクセスをより容易にすることも必要だ。

福井城址一帯をコンベンションセンターを含めた文化ゾーンとして整備し、県庁舎等及び福井市庁舎を移転し、アクセスのための新交通整備など一体的な開発が、福井市中心エリアの交流人口の増加を促すことに有効であると考える。

## 2. 福井城址公園整備～文化ゾーンとして県美術館・市文化会館も～

### (1) スマート・ベニュー

これからの人口減少社会を見据え、財政状況が厳しくなる中では都市機能の集約化が必要であり、その施策の一つとしてコンパクトシティ化がまちづくりの考え方として有望視されている。

それには中核施設を作り、地域内外から人が集まり交流する MICE やスタジアム、アリーナなどは未来の福井城址周辺の在り方として適切と考える。東公園に整備予定であった福井市文化会館の機能も兼ね備えることが出来れば、場所的にも効率的にも有効だ。また老朽化が進む福井県立美術館の移転候補地としても考慮できるだろう。防災的な役割も含め、スマート・ベニュー（注）のような考え方の導入を進めるべきである。

福井城址公園周辺は、現在のように行政区画として未来数十年間あり続けるよりも、交流人口が増加するように MICE や文化施設等を整備しエリアマネジメントを行うべきと考える。

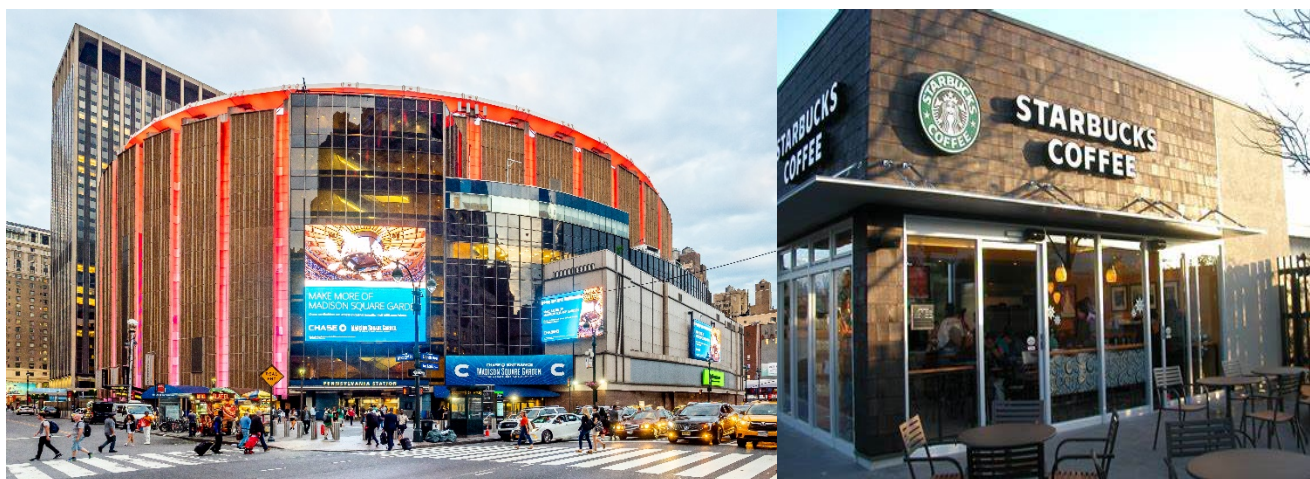
### 注) スマート・ベニュー

コンパクトシティの中核となり得るような多機能複合型の交流施設のこと。2013年に(株)日本政策投資銀行がまちづくりモデルとして考察内容を発表した。

## (2) 県庁跡地の活用～コンベンションなど MICE を活用～

私たちは2015年に福井城址内のコンベンションホール整備について提言を行った。サンドーム福井（建築面積 約 8,000 m<sup>2</sup>）と同等クラスであれば県庁跡地内に充分可能だ。県には是非整備の検討をしていただきたい。施設命名権（ネーミングライツ）を活用し、民間の活力を導入しやすくするため、弾力的な使用条件に緩和して、福井県も協力していくようにしてほしい。

コンベンションホールの用途は幅広く、福井県下の経済に対するネットワークの向上、新ビジネス、イノベーションの機会を呼び込むことに繋がるなど一括りにすることはできない。しかし周辺施設や県内観光地等の魅力も合わせて、“ふくい”の訴求を再確認する核となることは間違いない。音楽イベントや、スポーツ大会、展示会や学会以外にも、企業ミーティングやインセンティブ旅行など需要掘り起こしが、福井の交流人口拡大に繋がることを期待したい。



コンベンションホール（引用元 Wikipedia MadisonSquareGarden）      コーヒーショップ（引用元スターバックス）

## (3) 市庁舎跡地の活用～文化遺産と市民が憩う空間づくり～

福井市中央公園のリニューアルが完了して、様々なまちなかイベントも行われるようになった。片町への波及もあり、想像以上の効果を生み出している。家族や仲間と、友達や恋人と、外で遊べる観光と文化が交わる公園整備は是非とも必要だ。

福井市庁舎跡地は、文化遺産としての堀の遺構活用など歴史を象徴しながら、人が集まる緑豊かな空間を段階的に作り上げたい。市民が集い、季節を感じ、散策できるルートや、コーヒーショップなどを誘致し、アウトドアな雰囲気の中で CAFÉ やレストランで食事を楽しめる施設を作る。お堀は夜ライトアップし、幻想的な雰囲気を醸し出せるとなお良いのではないだろうか。

### 3. 県庁舎などおよび市庁舎移転

#### (1) 県庁移転に係る今までの経緯

今からさかのぼること約50年前の1960年代から70年代にかけて、置県百年を機に福井県は県庁の新庁舎を建設することにした。丁度1975年には現在の福井市庁舎が竣工し、戦災・震災と幾多の苦難を乗り越えて、福井市も新しい時代に向けてスタートしたころだ。

このとき県庁移転論議が巻き起こった。顔が無いと言われた福井市のシンボルを作るとして、城址公園の建設など6千人を超える署名運動もあり陳情書も提出された。当時の故島田博道福井市長は、「県庁移転は市民の悲願」と積極的であった。

そもそも県庁舎が現在地に移ったのは1923（大正12）年のことだ。城主松平氏が君臨した福井城跡地に県庁を設置したのは、城下町ならではの文化と当時の事情を考慮するに自然なことだったと推察できる。

県庁移転推進派は、福井市中心部に唯一残る文化遺産として跡地を公園化する案で、お堀でボートが楽しめる憩いの場に、場内は県会議事堂と県警本部の建物を生かし、図書館や美術館をつくり、一大文化ゾーンにするなどとしていた。中央公園に県庁を建設する「近隣移転案」や、焼失した福井城の天守閣再現を主張する声もあった。

移転後の跡地利用について議論が活発な一方で、県庁で働く人たちとの商売が死活問題となる地元商店街は移転反対の声をあげた。また交通の利便性を理由に小浜市議会、敦賀商工会議所など嶺南各地から移転反対の陳情もあった。更に肝心の県庁の移転先がネックとなった。1973年、故中川平太夫知事の要望で、県議会に庁舎建設の特別委員会が設置され、福井市運動公園周辺や福井農林高校周辺などが候補に挙げられたが、いずれも決定打に欠き十分な賛同を集めることが出来ず、結局1975年3期目の当選を果たした故中川平太夫知事が現在地建設を表明した。

#### (2) 移転議論を進めよう

県都デザイン戦略及び私たちがいままでに行ってきた提言や、福井商工会議所など他の団体からも県庁移転に関する様々な意見が出されてきた。前回提言においては、JR福井駅から三角地帯を経て福井城址（コンベンションホール）へ至る軸、福井城址から三角地帯を経て新栄商店街へ至る軸を主張し、駅西商店街の活性化も謳った。

しかしその提言後に JR 福井駅西側再開発計画が進み、新栄商店街エリアなどの候補地となっていた一帯も対象エリアが狭くなり、用地取得は多難で現実的に難しくな



ってきた。また一方で新文化会館整備計画も宙に浮くなど、状況の変化により再考する必要が出てきた。「県都の顔」にふさわしくなるよう中心部の遊休土地・資産を活用すべきで、そのためにも私たちは県・市庁舎の移転議論を進めてほしいと考えている。検討段階の中で、移転候補地がいくつかあるが、種地としてまとめにくい場合も考慮し東公園のケースも考えてみた。

### (3) 行政機関をまとめること

現在、県庁舎と市庁舎は隣接した立地となっている。これは他の都道府県よりも機能的で、県民や市民にとっても便利であり、これから目指すコンパクトシティ化には欠かせない要素である。先に述べた県庁移転論議が頓挫した理由の中には、せっかく近接している行政機関を離すべきではないとの意見もあったであろう。

人口減少社会において、核となる県・市庁舎がバラバラに立地するのは出来るだけ避けたい。今後数十年の間に、道州制など行政の枠組みが変化することもあり得ることを想定すれば「県庁舎・市庁舎を ONE TEAM」として、まとめて移転するのはどうだろうか。これらの動きは福井県がひとつとなり未来に向かうというメッセージとなる。

### (4) 現庁舎と東公園の概要

#### ①現福井県庁舎などの概要

敷地 21,048 m<sup>2</sup> (JR 福井駅からの直線距離 300m)

	竣工	地上	地下	建築面積	延べ床面積
(ア) 本庁舎	1981年	11階	3階	3,611 m <sup>2</sup>	43,173 m <sup>2</sup>
(イ) 議事堂	1966年	3階			3,901 m <sup>2</sup>
(ウ) 県警本部	1988年	6階	2階		16,212 m <sup>2</sup>

※駐車場 普通車 414 台 (屋内地下 1 階 208 台 地下 2 階 166 台 屋外 40 台) 駐車台数は建築当初のもの。現在は車の大型化で駐車可能台数は表示台数より減っている

#### ②現福井市庁舎の概要

敷地 6,266 m<sup>2</sup> (JR 福井駅西口からの直線距離 400m)

本館	竣工	1975年	地上9階・地下2階	建築面積	2,500 m <sup>2</sup>	延べ床面積	18,746 m <sup>2</sup>
別館	竣工	1962年	地上5階・地下1階	建築面積	1,400 m <sup>2</sup>	延べ床面積	6,060 m <sup>2</sup>
アオッサ							753 m <sup>2</sup>
合 計							25,559 m <sup>2</sup>

大手駐車場 1977年竣工 2階3層 5階6層 自走式 264台収容

### ③ 福井市東公園

敷地 31,008 m<sup>2</sup> (JR 福井駅西口からの直線距離 550m)

歴史を紐解けば、1898年(明治31年)この地に福井県師範学校が設立された。戦後、福井大学が発足して師範学校は廃止された。1948年(昭和23年)福井市営球場が設置され、2008年(平成20年)老朽化により解体され現在に至っている。

地震本部によると、福井平野東縁断層帯からも離れており、震災時は現在地と同程度の強度が確保される。また福井市洪水ハザードマップによると、東公園北側の一部が降雨量70mm/hの時に浸水被害予想として出ているので対策は必要と考えられる。

### (5) 新県庁舎・市庁舎+県警本部



手前から新県庁舎、奥が新市庁舎。5階までが共有スペース、屋上には展望スペースやドローン発着場がある

福井を代表する建物なのでスタイリッシュなデザインになってほしい。現在の機能をカバーすることや働く人たち、訪れる人たちにとり快適な空間となるようにしたい。県庁舎と議会は同一のビル内に収め、県警本部ビルは別棟とする。市庁舎も議会を含め同一のビル内に収める。万が一の水害による被害を防ぐため、地下は設けず地上にすべてを設けていく。

## 【イメージ】

県庁舎	建築面積	3,600 m <sup>2</sup>	地上	18階	
市庁舎	建築面積	2,500 m <sup>2</sup>	地上	11階	
県警本部	建築面積	2,000 m <sup>2</sup>	地上	8階	
立体駐車場	建築面積	3,600 m <sup>2</sup>	地上	4階	600台収容

屋上からはドクターヘリや有人ドローンが離発着できる基地機能を備えておく。日常的な巡回パトロールだけでなく、緊急時に現場へ急行できるようにするためだ。

両ビルが高層になると街を一望できる場所となる。いままで福井には、高いところから街全体を見渡せるところがなかった。東京都庁とまではいかないが、福井の街を中心部から眺めることが出来れば、昼は白山連峰を拝み、夜は福井版100万ドルの夜景を眺めることが出来る。名前は“継体展望台”として、足羽山にある継体天皇像と同じように、福井の九頭竜川治水を考えられるように、三国方面をしっかりと見渡せるようにする。

ここでは県下の全幼稚園・保育園・小学生を招待し、この故郷に誇りを持ってもらえるようにしたい。県外からの観光客には、福井を紹介する拠点にしてもらいたい。福井花火のときなどは、県内外の未婚カップルを招待し福井でプロポーズ→結婚→定住につなげたい。

## (6) 開放的な議事堂 (OPEN PARLIAMENT)

議会は民主主義を象徴し、機能させる存在だ。いままでのものは壁に囲まれ、品格を尊重し重厚な雰囲気のものほとんどだ。かつて西ドイツの首都ボンにあったドイツ連邦議会 (Deutscher Bundestag) は、大きなガラス張りの議事堂となっており、議会内からライン川と街並を眺めることができた。多くの見学者が国内外から訪れ、当時の西ドイツ国民には中身も光景も“開かれた議会”として誇りでもあった。

新議事堂整備においては、各新庁舎の一階に設置し、訪れた県民や市民から容易に観覧できるようにしてはどうだろうか。

福井を代表する足羽山や足羽川、街並みを眺望できるような大きなガラスで囲まれたしつらえの中で、人々と福井を感じながら、政策の議論をしていっていただきたい。



足羽山を眺めながら (引用元 じゃらん 足羽山公園の桜)

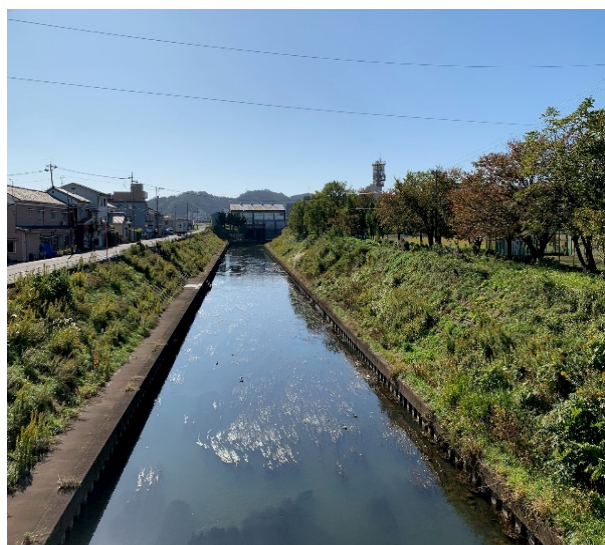
新潟県長岡市のアオーレ長岡内にある市役所及び市議会は、1階のアオーレ広場に面しており、ガラス越しに広場から市民が見ることができるようになっており、参考にしたい（2013年10月長岡市アオーレ長岡を視察）。

注）1981年 県庁舎建替時は、総事業費は120億円、設計などに2年、建設に3年、計5年を費やした。また建設期間中は、福井市月見（現福井市カルチャーパーク）にあった旧福井工業高校跡地（のちに県立足羽高等学校）に一時移転した。

#### （7）荒川リバーサイドパークの整備

新県・市庁舎ともなれば隣接する荒川水門附近も良質なロケーションとして捉えることができる。現在は手つかずの状態だが、水辺に親しむ親水公園化を図ることが出来る。

前回提言でも触れたように、荒川水門と荒川の流れを活用して水門の見学コースやジョギングコースなどもいい。また昼も夜も風景を楽しみながら食事が出来る景観づくりや、飲食店の誘致などクールでおしゃれなリバーサイドパークとなしてほしい。



荒川と荒川水門 両岸もきれいに整備したい・・・

### 4. 二次交通の充実（新駅構想）

移転後の新庁舎へのアクセス確保は重要だ。石川県や岐阜県のように主要駅から遠く離れたところに新県庁舎が移り、車やバスを利用しなければアクセスできなくなることは、県民にとって不利益をもたらす。従って、移転と交通の確保はワンセットと考えるべきだ。以下新交通システムや鉄道を利用した案を示したい。

#### （1）新交通システム案～自動運転システム～

JR 福井駅東口からの自動運転システムを構築し、国道158号線を渡り東公園前にターミナルを設置する。これによって、オンデマンドで新福井県庁舎へ乗り物でのアクセスをより近づけたい。

交通量の多い国道を横断することが必要になる。現状のまま追加の交通手段が設置されないままであれば、JR 福井駅からのアクセスが、徒歩かシャトルバスなど車両によるものとなるので、どうしても158号線を横断する必要があるが、それを回避できる効果は、安全面でも経済面でも非常に大きい。

JR 福井駅～旭小学校～国道158号線交差点～東公園の路線を遊歩道として整備し、JR 福井駅～東公園区間に自動運行モデルを採用してはどうだろうか。東古市～永平寺間の旧京福電鉄永平寺線の廃線跡を利用した遊歩道「参（まい）ろーど」の事例もあり、数年後には実装段階に進むと考えられている。長いスパンで考えれば、市街地中心部への車によるアクセスを減少させ、鉄道と新交通システムによる点と点をつなぐことが出来るようになれば、街全体の効率アップや賑わいの創出にも寄与する。予定地周辺の企業や住民の方にも大きなメリットがあると考えられる。

## (2) 現 JR 北陸本線に新駅設置案

福井駅～越前花堂駅間の足羽川北詰に新駅を設置する。北陸新幹線敦賀延伸後は第三セクターへの移管が予定されている北陸本線は、福井～森田間やサンドーム附近にも新駅構想があることから、敦賀方面からや金津方面からも利便性は高まる。メリットとしては、新たに延伸工事が不要なことだ。従来の線路をそのまま使用でき、駅の設置のみ考えれば良いということになる。

デメリットとしては駅設置スペースの確保だ。3両編成以上の運用はないことから、現在のしらさぎやサンダーバードのように長いプラットフォームは不必要となるので、短縮型のプラットフォームでの運用は可能と考える。



(引用元 Google Map)

## 5. まとめ～オール福井でクールふくい！～

「なんで、県庁がお堀の中にあるの？」「福井城址は憩いの場であつたらいいのに」

ずっと以前から少くない県民や県外から福井を訪れる観光客や出張者からささやかれてきた声である。県都デザイン戦略でも述べられてきたし、我々も訴えてきた県庁移転問題。一見ローカルなことにも見え無駄に思うこともあるだろう。しかし、これまで述べてきたように夢のある福井に向かっていく起爆剤となり、それは県民の支持を得られるものと考えている。

私たちは今回、議論を巻き起こすために提言させていただいた。その移転候補地に案として福井市所有の東公園を活用し、そこへの県庁舎建設となるケースとした。県都福井のリニューアルには県と市のベクトルが合うことが、一にも二にも必要だ。県民一体となって積極的な議論を展開し、経済的な波及効果も期待できるこの構想に少しでも多くの人々に同調していただきたい。福井県と福井市の英断を期待する。

また県庁移転は福井市だけではなく、他の地域からのアクセスもしっかりと考えておかなければならない。現在地より駅から遠くなることがデメリットとならないように、新交通システム案や新駅構想も提案した。これは2020年度末頃にリリース予定の“福井版スーパーシティ構想”で発表予定の内容だったが、関連性が深かったので先行で述べさせていただいた。

スタイリッシュでクールな格好いいタワービルが新幹線の車窓から見えてくる・・・あつたらいいなという未来像である。北陸新幹線で東京と直結し、これから阪神方面とつながれば本州の中にグルっと一周高速鉄道網が出来上がる。日本国土の有効利用や、地方創生にもかかわる話であり、福井のプレゼンスは嫌がおうにも上がるであろう。まさに百年に一度の街づくりのチャンスなのである。

多くの人たちに、福井を訪れてもらおうではないか！そして私たちが我が街に誇りと希望をもって出迎えようではないか！もしかしたら、仕事が無いとか、田舎だからとか様々な理由で福井を去った人たちが帰ってくるかもしれない。都会に出ていった若者たちが戻ってくるかもしれない。そんな期待感も込めて提言させていただいた。

令和の代となり、2031年に150歳となる“福井県”にあらためて目標設定することだ。県都福井のまちづくりは大きなポテンシャルを持っている。

以上